

---

# 軽音部の日常

はわわ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

軽音部の日常

### 【Nコード】

N4284W

### 【作者名】

はわわ

### 【あらすじ】

今年、桜ヶ丘高等学校の二年生になった櫻木晴樹は、いつものように、学校生活を送る…

## 第一話

俺は、まどろみの世界から帰還した。

「寝ちつたのか…」

自分が寝ていたのがアパートの自室のベッドではなくデスクに突っ伏して寝ていたことからパソコンを操作しながら眠ってしまったことが分かる。

ふとディスプレイに映る時計に目をやると。7：02と表示されていた。

部屋の窓をガラリと開けると、朝日が部屋の中に射し込む、外を見るといつものようにを近所のお婆さんが箒で地面を掃き掃除していた。通勤中のサラリーマンが道を歩っている。

「んっ？」

そんないつもの風景とは違った異彩を放つ人物を目撃した。

その人物は、真新しい制服（スカートなので女の子だと思われる）を身にまとい、寝癖の付いた髪を揺らしながら、食パンを口にくわえ、けして速いとは言えない速度で走っている。

「おはよう。」

「はあ、はあ、おはよー」

その女の子は、お婆さんと挨拶を交わし走っていった。

制服からして、俺が通うのと同じ桜ヶ丘高校の制服だが

「何故に、あんなに急いでるんだ？まだ、7時だぞ、学校は、8時登校のはず…」

考えてもしょうがないと思い、とりあえず台所に向かう。

さっきの女の子は、見ない顔だったが、なかなかの美少女だったな、そういえば今日は、入学式だ、だとするとおそらくあの子は、新入生か…

そんなことを思いながら、冷蔵庫を開けると。

「なっ…」

冷蔵庫の中には、朝食になるようなものが何一つ存在していなかった。

「とりあえずコンビニ行くか」

俺は制服に着替えて鞆とギターケースを手に取り部屋を出た。

『いらっしゃいませ』

コンビニに、入るとよく見知った人物を発見したその人物は、なにやら雑誌をに立ち読みしている。

「美希さんおはようございます。」

「あら、ハル君、おはよう。」

この人は、七瀬美希さん、俺のひとつ上の先輩で三年生だ、艶やかな長い少し茶色をおびた髪とインテリ感をもし出す黒ぶち眼鏡が特徴的だ。

「ハル君今日は、登校して来るのが早いけど、どうしたの？」

雑誌をガサガサと棚に戻しながら美希さんは聞いててきた。

「いや、自宅に食料がなくて、とりあえずコンビニで何かしら食料をと思ひまして。」

「ふーん、ハル君の家には、食べ物がないていつもコンビニに頼ってだらしない生活を送っているとそして、食生活が偏り栄養バランスも崩壊、よってハル君の身体は…」

「ちょっと、美希さんっ！今日はたまたまですって！」

聞かれたから答えただけなのにえらいことになってしまった。

「ふふっ、冗談よ。」

そう言つて美希さんは、いたずらばい笑みを浮かべた。

「それに、ハル君が本当にそんな生活してると思つてないわ、仮にもし、

そうだったらご飯でも作りに行くんだけどなあ。」

「本当ですかあ！」

「それも、冗談よ。」

「ぐおおおおっ……」

俺が、声にならない叫びを放っていると、美希さんは、じゃあねとヒラヒラと手を振りコンビニを出て行ってしまった。  
どうやら一緒には、登校してくれないらしい。

「まあ、朝から、美少女に会えただけでも良しとするか。」

俺は、買い物を済ませ、コンビニを出た。

コンビニを出た俺は学校に向かうべく歩っていた。すると、道の途中で何だかキョロキョロとしている女の子がいた。

「あのぉ」

「はい？」

「何か、お探して　グハッ　すか。」

振り返ってこっちをみた女の子があまりにも美少女だったので、一瞬たじろいってしまった。

「あの、桜ヶ丘高等学校というところに行きたいのですが…」

「えっ、桜校になら俺もいま向かってるところだから、一緒にどう？」

「そうなんですかぁ、助かりました、では一緒に。」

俺とその美少女は、並んで学校への道を歩く。

「真新しい制服からして今日、入学する新入生つつところかな？」

「そうですね、でも入試のときは、車で来ていたもので、道が分からなくて。ありがとうございます、本当に助かりました。」

「いやいや、礼には及ばないよ。あ、名前、言ってなかったな。俺は、櫻木 晴樹、よろしく。」

「よろしくお願いします、櫻木さん。私は、琴吹 紬、といいます。」

「よろしく紬ちゃん。」



そんな会話をしながら、二人は、校門をくぐった。

入学式が終わり、下校するだけとなった今、美希さんから用があるので部室に来てとのメールがきた。

俺が所属している部活は軽音部だ、と言っても今は去年までいた先輩達が卒業してしまったから、俺と美希さんの二人だけが部員だ。二人だけということで先輩達が卒業してから今までは、実質活動はしていなかった。

まあ、たまに二人で部室で駄弁ったり勉強したりすることはよくあった。

部室の扉のドアノブに手をかけ扉を開く。

部室に入ると、美希さんが窓から外を見ていた、ボーツとしているようにも見えるが何だか悲しそうな顔にも見える微妙な表情をしている。

「あつ、あの美希さん？」

「…あら、ハル君来てたの。」

「もしかして、俺が来るの遅いから寂しかったんですか？」

「ふふっ、ちょっと考え事してただけよ。」

美希さんはそう言つと、椅子に座る。

「そういえば、用ってなんですか？」

俺は、食器棚にある湯飲みを2つ取りだし、番茶を淹れる。

「ああ、新入部員の獲得の作戦会議よ。」

「勧誘しないと、いけないですね。」

「まあ、そう言つこと、新入部員獲得しないには何も始まらないわ。」

「お茶どうぞ。」

「ありがとう、ハル君は何かいい作あるかしら？」

そして、俺は美希さんの向かい側に座る。

「ビラを配るのは、どこの部もやってますから…ビラに『今入部すると美少女がもれなくついてくる!』と書くとか。」

「却下。」

一刀両断されてしまった。

俺だったら、即入部するんだけどなあ。

「ハル君、他にはないの？」

美希さんが若干呆れながらさらに意見を求めてくる。

「他、ですか。…んー美しよ」

「美少女が、なんたらとかは、もうやめてね。」

「ん……………」

そして、暫く考えてみる。

「美希さん……」

「なに、ハル君？」

「思い付かないです……」

俺の脳は、美少女関連じゃなくなったとたん全く働かなかった。俺の思考能力の乏しさに悲しくなってきたぜ。

「さすがね、ハル君。まあ最初から期待してなかったわ。」

「ガーン」

「それに、ビラは、もう一年生全員に配ったわ。」

一体、どうやって一年生全員に配ったのかは凄く謎だが、あえてツッコまないでおこう。

「じゃあ、この会議、意味ないじゃないですかー!」

「そうよ、ただハル君をいじりたかっただけ。」

美希さんは、とんだペテン師だった。

## 第一話（後書き）

なるべく早く更新したいです。

まだ一話目ですが。感想とかいただけたら嬉しいです。

## 第二話

美希さんによる、意味のない作戦会議が行われてから一週がたった日の放課後。

『新入部員が入ったら連絡するわ。』

と言った美希さんからは、全く連絡が来ない。もしかして誰も入部してこないのだろうか。だとしたら、部員数が足りず軽音部は廃部になってしまっただろう。

やっぱりビラ配りだけじゃダメだったか…

そんなことを思っていると、あることを思い出す。

「そっいや、ギター…」

入学式の日には部室に置いてったきり忘れていたことに気づく。ここ一週間、いくらバイトが立て込んでいたからって大事なギターを一週間も放置は流石にまずい。

ちなみに俺は、アパートで一人暮らしをしているので生活費稼ぎにバイトをしていたりするのだ。

「もしかしたら、新入部員が来ているかもしれないし。」

というわけで、部室に向かう。

「なっ…」

部室に入った俺は、驚愕する。

そこには、椅子に座る美希さんと新入部員らしき三人がいる光景。  
俺の存在に気付いた美希さんがこちらを見る。

「あら、ハル君やっと来たわね。」

「…ひ」

「ひ？」

俺は、若干涙目で全てをぶつける。

「ひどいじゃないですか！俺、新入部員来るの楽しみにしてたのに

！自己紹介イベントとか、いち早くやりたかったんですよ！それに『部員入ったら連絡するわ』ってのは、なんだったんですか！言ってくればバイトの時間とか、やりくりして来たものを！何で連絡くれなかったんですかぁ！」

「盲点だったわ。」

「自分で言ったん、でしようがぁぁっ！」

美希さんは、ペテン師どころの騒ぎじゃなかった。

「まあまあ、そう騒がないの、ほらハル君が来て早々叫び出すから三人ともドン引きしてるじゃない。」

「うつ、」

そう言われて、俺は初めて三人が俺を見て引いてる事に気づく。てか、三人の中の一人がよほど驚いたのか、気絶していらっしやる。美希さんが、パンパンと手をはたく。

「じゃあ、自己紹介イベントやりましょうか。」

「おい、漣ー」

「うつうつ。」



一人が、気絶した子を帰還させる。

「よっしゃあっ！」

やっと来た自己紹介イベント、遅れたとはいえ、テンションが上がるのが俺なのだ。

三人とも椅子から立ち上がりカチューシャの子が一步前に出る。

「私は、田井な」

「田井中律さんに、秋山澪さん、それに琴吹紬さんだね。俺は、櫻木晴樹、よろしく！」

「「「へっ？」」」

三人同時に、ポカンとする。

そして、紬ちゃんが疑問を投げ掛ける。

「私とは入学式的时候会いましたが、どうして、二人の事知ってるんですか？」

「そうですよー私と澪は会ったことないですよ。」

「そっ、そうですっ！」

「俺、桜校の美少女の名前だったら全員頭に入ってるんだ。一年生はまだうる覚えで完全じゃないけど。いやー今年の一年生女子は皆、美少女で素晴らしい！」

「「「え……」」」

えっ、なにこの空気、三人とも俺を非難の目で見ている。俺、なんか変なこと言ったか？

「ハル君、自らの手で自己紹介イベント消滅したわね。」

「えっ、俺は普通に自己紹介を……あ」

俺は、盛大にやっちゃった事に気づく。

確かに、テンションが上がった俺は余計なことをベラベラとしゃべってしまった、くそっ、なにやってんだ俺は！もうちょっと考えてから話せよ俺！俺はバカなんですか？バカなんだな？バカなんだよ！！

もうためだ、今俺が居るのは、部室？学校？公共の場？そんなことあ関係ねえ！！

L e t ' s   s h o u t ! !

「やっちゃまったあああああつ！！！」

そして、ザワザワしだす美少女たち。

「あの、櫻木先輩が凄い事になってるんですが大丈夫なんですか？」

「ムギが、最初に会ったときもこんなだったのか？」

「私が初めて会った時はあんな感じじゃなかったような…」

「心配無用よ、ハル君はいつも、こんな感じに叫んでるわ。安心して。」

「「「そうなんですか…」」」

「いや、違うわっ!」

俺は、慌てて美希さんに反論する。てか、それで安心されてたまるか。

「現に今、叫んでるじゃない。」

「でも、それは今だけですっ!」

「うるさいさいわね。シッシッ」

そう言って美希さんは、手で払う動作をする。  
何かひどい扱いだ。涙か溢れてくるぜ。

「俺はゴミか何かですかああっ！うわああんっ！」

「なーんか、怒ったり、叫んだり、泣いたり忙しい先輩だなー。」

「感情が豊かというか…」

「面白い人だわぁ」

「「えっ!？」」

そんな俺を見て、新入部員三人集が話している。

何か、三人に与えた俺に対しての印象が変な感じに…

ここは何かしないと後々大変なことになるのではないか？これはやばい。

「み、美希さん、これでやっと部活できますね。はははヨカッタ、ヨカッタ。」

俺は、このままではまずいので、平静を装うが…

「どうしたのハル君、急に泣き止んだわね…」

美希さんは、俺の豹変ぶりに疑問を持つ。

「あ、そういうこと。このままじゃハル君変な子のままだものね。」

美希さんは、そう言うとうんうんと頷きながら読書を始めた。どうやらもう俺を弄ぶのに飽きたとみた。

てか、一瞬で気付かれてしまった。

まあ、いきなり泣き止んだりしたら、そりゃあ疑問ぐらい誰だって持つだろう。

だがしかし！ここまで他人の思考を読めるのだろうか、俺はそんなに分かりやすいか！？どうだい？…誰に聞いてんだ俺は。

とりあえず、美希さんの魔の手から逃れたわけだ、新入部員と親睦を深めるとするか。

「ささっ、三人とも座って座って。」

俺は、三人を椅子に座るように促す。

すると、三人はさっきまで座っていた席につく。

俺は空いている席につく。

「三人はいつ入部したの？」

「私と漣は、入学式の次の日です。」

「私は、二人が入部した次の日です。」

「そうか入学式の次の日とその次の日か…結構早く入部してたんだ…」

ということは、美希さんは『入部してきたら連絡するわ』と言ったのが一日で盲点になったと。…絶対わざとだな。

「櫻木先輩は、なんの楽器やってるんですか？」

律ちゃんが聞いてくる。

「俺はギターやってるぜ。ほら、あそこにあるやつ。」

俺は部室の隅っこに立て掛けてあるギターケースを指差す。

「あれ先輩のだったんですか。美希先輩に聞いたときは、『あれは、誰のものでもないわ…持ち主は、もう居ないわ…』って言ってたから何なのかと思ってましたよ。何かホントっぽかったし…」

「そつ…そうなんだ。」

俺は流石に一週間も忘れていたとは言えず曖昧な返事をする。  
ふと、美希さんを見ると、美希さんは見知らぬ高級そうなティールップで紅茶を飲んでいるのが目につく。

「美希さん、そのティーカップどうしたんですか？」

読書していた美希さんは、本へと向けていた視線をこちらに向けてくる。

「ああ、これはムギちゃんが持ってきてくれたのよ。後、紅茶もね。」

「へー細ちゃんが。」

「はい、家に沢山あったものをすこし持ってきたんです。」

見渡すと、美希さん以外の三人もティーカップを使っている。

てか、こんな高そうなものが家に沢山あるものだろうか、いったいどんな家に住んでいるのだろうか。

ニコニコしていた細ちゃんは、いきなりハッとした様子でこちらを見してきた。

「あつ、先輩にもお茶淹れますね。」

「あつ、俺は。」

お茶なら、自分で淹れるからと言おうとしたがそこでやめる。  
何故なら、細ちゃんは、とても楽しそうにお茶を淹れに行ったからだ。それには、止め難いものがあった。

紬ちゃんが席をたった事によって、澪ちゃんと目が合う。チャンスとばかりにイケメンフェイスを作り、齒をキラーンとするが…瞬時に目を逸らされてしまった。…ショックだ。え、なに、嫌われてんのかな俺。

いや、初対面だから緊張してるんだな、可愛いヤツめ。そんなことを思っただけで澪ちゃんをジロジロ見ていると、律ちゃんが手招きをしてきた、

「（先輩ちょっと、ちょっと。）」

子声で言ってくる。

律ちゃんが机に身をのりだしこちらに近づくと、こっちも身をのりだして耳を貸す。

「（澪は、人見知りなんで初対面の人の前だとあんな感じで。）」

澪ちゃんを見してみる。

俺の視線気付くと無表情のまま固まった。

「（人見知りっであんな感じになるか？普通。）」

「（まあ、極度の人見知りなんで。）」

「（でもあれ、ずっと見つめてたら石化する勢いだけど…）」



「（昔からああなんで、まあそのうち漣も慣れますから。）」

また漣ちゃんをしてみる。

俺の視線に気づくと、今度はティーカップを持ち上げたり、もとに戻したり、置いたティーカップの角度を調節してみたりと、なかなか落ち着かない様子だ。

「ねえ、漣ちゃん。」

「はっ、はいっ！」

漣ちゃんは俺が声をかけると触っていたティーカップをガシャッと鳴らす。

「いま、彼氏居る？」

「えっ……」

「ブウウッー　ゲホゲボっ」

律ちゃんが、飲んでいた紅茶を豪快に吹き出す。  
漣ちゃんの顔がみるみるうちに紅くなっていく。

「なっ、いつ、居ません!!」

そう言っで漣ちゃんは、俯く。

「じゃあ、俺と付き合ってくれ。いや、結婚して下さい!」

「ええっ!??そ、そんな、会って間もないのにむっ無理ですっ!」

「みつ、漣、落ち着けて。」

紅くなりすぎていまにも爆発しそうな勢いの漣ちゃんを律ちゃんがなだめる。

「でっ、でも律。プロポーズされ…」

「落ち着いて漣ちゃん、ハル君は女の子には軽率にこういうことする子よ。」

割りと本気なんだがと思うが口には出さない。

「ほら、漣。だから落ち着けて。」

「でっ、でも律。プロポーズされ…」

「それは、挨拶みたいなもんだってきつと。」

「でっ、でも律。プロポーズされ…」

「人の話を聞け。」

律ちゃんが呆れる。

美希さんは、面白そうに湊ちゃんを眺めている。  
そこで、紬ちゃんが後ろからやってくる。

「お茶が入りましたよ」

「おっありがとうございます。」

俺は紬ちゃんから、ティーカップを受け取り、一口飲んでみる。

「うまい!!」

「ありがとうございます。」

「こんなにも美味しいお茶を飲んだことは、産まれてこのかた一度もないっ!」

俺は神速で立ち上がり紬ちゃんに近づき、手を握る。

「結婚して下さい!!」

「ごめんなさい。でも、気持ちだけ貰います。」

「ぐはっ！」

瞬殺だった。

どうやら、さっきの会話を聞いていたようだ。

「ほら、零。だから大丈夫だって。」

「でっ、でも律。プロポーズされ……」

「人の話を聞けええっ！」

「じゃあ、よろしくね。」

美希先輩が、櫻木先輩に声をかける。

「美希さん、また明日。」

「晴樹先輩お先です。」

律も声をかける。

ムギは、少し申し訳なさそうに頭を下げている。  
何故ムギがそんな態度をとったかというと。

『もう下校時間ね。』

『ティーカップ片付けますね。』

『俺が片付けるんで、皆先に帰っていいですよ。』

『でも…』

『いって、ほら、下校時間過ぎるとあれだからさ。』

こんなことがあったからだ。

私は、こっちを見てみる先輩に、軽く会釈する。  
美希先輩が部室のドアをガチャリと閉める。

「じゃ、帰りましょうか。」

美希先輩が階段を下る。私達もそれに続く。

「なあ、漣ー。」

「何だ？律。」

「もしかして、人見知り克服したのか？」

「えっ？何で？」

「だって、晴樹先輩と初対面なのに結構喋ってたじゃん。」

「あ。」

そういえばそうだ、始めはいきなりあんな事言われたけど、その後は結構話せた。先輩は初対面なのに…

「何でだろう。」

「まあ、いい人そうだし。馴染み易かったんじゃないか？」

「そうかな？」

ちよつと思議な感じだな。あの先輩。前を美希先輩とムギが歩っている。

廊下の窓から見える外は、きれいな夕日が見えて、まるで燃えてる  
ように空が紅く染まっていた。

## 第二話（後書き）

読んでくださった方々ありがとうございます。



### 第三話

「ん……」

美希さんの盲点だったわ発言から一週間がたった今日、俺は悩んでいた。

何故なら、今日はいつもより早い時間にバイトが入っていきからだ。普段は学校が終わってから時間のながちよくちよく早い時間に臨時にバイトが入ることがあるのだ。今は、バイトまで少しだけ時間があるので部屋に来て美希さんと一年生の三人で駄弁っているところだ。だがしかし、もう時間的にバイト先に向かわなければならぬ。携帯のディスプレイの時計を睨み付けながら悶々とする。もっと話していたいがかんせんバイトには行かなければならない。うーん。

「なんたるジレンマっ!」

「なんすかいきなり……」

俺が叫ぶと律ちゃんがジト目で俺を見てくる。

「ハル君なんでいきなり叫び出すの?何か変よ。…あ、いつもそうだったわね。ごめんね。」

美希さんは叫んだことを特に気にしていない様子でこちらを見てくる。…何かひどくね！？まるでいつも俺が叫んでるみたいな言いぐさじゃないか！？。

「えっ、違ったかしら。」

「しれっと心を読んできましたね…はっ！これが以心伝心というやつかつ！ふっふっふっ…もうゴールインは近いようですね。さあ！美希さん結婚しま。」

「ハル君」

美希さんが笑ながら怒っている。ヤバい超怖いぜっ

「つか、なんでジレンマって？」

律ちゃんが聞いてくる。

「よくぞ聞いてくれました。」

俺は少し溜めてから言い放つ。

「…残念ながら、俺は今からこの場を去らなければなりません。うっ…」

二人の反応を伺う…が

「あらそう、じゃあね。」

「先輩さよならっす。」

え！？なんか軽くあしらわれたよ！？ あれ、二人とも酷くないか？

てか、さっきから会話に参加してなかった澪ちゃんと紬ちゃんにいたっては、二人で会話しててこっちの会話を完全に聞いてないぜっ！無関心かつ！

「何か酷くなっ！ひき止めたりしてよっ！せめて理由だけでも聞いて！」

「聞かなくもわかるわ。ハル君どうせバイトでしょ？遅れるから早く行つてらっしゃい。」

「なんでわかるんですかつ！」

美希さんは読心術の達人なんだろうか。

「早く行つてらっしゃい。」

「はいっ！」

俺はビシッと敬礼して鞆を手に取り、部室を出る。

「先輩って扱いやすい人すっね…」

「私はハル君のそういう所好きよ…」

「まじっすか…」

「いじめ甲斐があるから。」

「そゆ事すか…」

部室を出た俺は廊下を歩いていた。

窓から外の風景を見ている。外では運動部が部活をしている。いやあー皆新入部員も入って本格的に活動してますな…

そっぴや、うちの部活活動してなくね！？いつも駄弁つてね！？このままじゃマズイなと思いながら、ふと前を見ると向こう側から女の子が歩いて来ているのが目についた。

その子は、周りをキョロキョロ見ながらふらふらと、いまにも転び

そんな歩き方で歩いている。

「こんな中途半端な時間に…」

今の時間に廊下を歩いているのはちょっと不自然だ。何故なら、放課後のこの時間は掃除も終わってから暫く経っているし、それに部活動をやっていない人は、ほとんどがすぐに家に帰る。逆に部活をやっている人の場合は部活にもう向かっているだろう。

それともう一つあるのが、この廊下の通りにある教室は文化系の部活が使っている教室がほとんどだ。文化系の部活は部室で活動するのでこの時間にこの廊下を歩っている人はほとんど見たことがない。

「のわっ」

瞬間、俺の横まで来たところで女の子が躓いてこちらに倒れて来る。それを俺は受け止める。

「大丈夫か？」

「ありがとうございます。躓いちゃってえ、てへへ。」

女の子は俺から離れると頭をペコペコと下げながらまた歩き始めた。俺も歩き出す。てか何もないとこで躓くか普通…まああんな歩き方だったらそりゃ転ぶわな。

何か心配なので振り返ってみる。

「あっ……」

また躓いていた。辛うじて転びはしなかったようだ。

「ドジっ娘……」

思わずそんなことを呟いてしまった。  
にしても、何処に向かってんだろ？

「あっ、バイト、バイトっ」

バイトまで時間がないので俺は急いでその場を後にした。

翌日の放課後、部室に向むかうべく俺は階段を上っていた。

「ふんすつ」

声がしたのでそちらを見てみると、踊り場の所から窓の外に向かってドヤ顔をかましている娘がいた。  
よく見れば、昨日転んでいた『ドジッ娘』もとい脳内から検索した結果名前は平沢唯、がそこには居た。

「あつ、昨日のっ…えつと…」

俺に気付いた唯ちゃんがこちらを見て言う。

「ああ、俺、櫻木晴樹、よろしく。」

「私は平沢唯、よろしく。」

いや、知ってるけども思ったが口には出さないでおこう。

「こんなところで何やってんだ？」

「あつ、今から部活に行くところなんだあー。」

「そうなのか…」

部活に入ってたんだなこの子…  
いったい何部なんだろ。てか、もう部室行かないとな。一刻も早く  
部室に行って美少女達と戯れるぜいっ！

「俺も部活だから、じゃあ。」

俺は、ヒラヒラと手を振って階段に足をかける。

「はっ！、私も部室行かなくちゃ。」

そう言つて唯ちゃんも階段に足をかける。

…ん？何かこつちに着いてきてないか？あ、唯ちゃんも部室がこつ  
ちにあるのか。そしたら音楽室…合唱部か何か？吹奏楽部かも…  
まあ、関係ないかと思ひながら階段を上りきり部室のドアのノブに  
手をかける。

ーガチャリ

ーボタン

唯ちゃんがドアを閉める。閉めてくれてありがたいな…ん？  
長椅子に鞆を置きいつもの定位置にむかう。唯ちゃんも鞆を置き俺  
のに続く…ん？

「おー唯ー」



「いらつしゃい唯ちゃん」

「ひ、平沢さん…こんにちわ…」

一年生三人が唯ちゃんに反応する。…ん？

俺はいつもの定位置に座る。唯ちゃんは空いている席に座る。…ん？

「ん？ちよちよつっ！何故に軽音部に唯ちゃんが居るんだ！？  
何か三人とも何事もなく唯ちゃんと話してるな…」

ガチャリ

部室の扉が開き美希さんが部室に入ってくる

「あら、ハル君と唯ちゃん来てたの。」

美希さんがいつも座ってる椅子に座る。

そして唯ちゃんと何か話している。

てか、なんで唯ちゃんがこの軽音部に居るのがかなり謎だ。

えっ、なんで皆普通に会話してんだ…

あっ

何かわかった気がするぞっ！ といってもまだ確信した訳じゃない。

「唯ちゃんは昨日も部室にできたのか？」

紬ちゃんに聞いてみると

「はい、来ましたよ。」

確信に変わった。

俺は勢いよく椅子から立ち上がった。

「今から皆さんには俺の考えた推理を聞いてもらいたいと思います。」

なんだなんだと全員がこっちを見てくる。

「唯ちゃんは、律ちゃん、漣ちゃん、紬ちゃん三人と友達で放課後お茶しないかという話になって唯ちゃんは軽音部に来ているっ！」

俺は唯ちゃんが食べてまくっているお菓子たちを指差して言う。

「何より唯ちゃんが飲んでいる紅茶と食べているお菓子たちが証拠だっ！」

「「「「はっ?」「」「」

えっ？

何か違ったようだ。

「と言う訳でハル君の完全な勘違いよ。」

「なん…だと。」

俺はかなり勘違いをしていたようだ。

かつてな思い込みをしていた俺に美希さんがとても丁寧に説明してくれた内容を簡単に言うと唯ちゃんは軽音部に入部したらしい。

つか、唯ちゃんは何か楽器できるんだろうか？見た感じできなそうだと思っていたから唯ちゃんが入部するというのは完全に思考から除外していた。それがこの勘違いのはじまりだった。

「そついえば平沢さん」

「唯でいいよ」

「えっ」

「いやーわたし澪ちゃんのこと既に澪ちゃんと呼んでるし」

澪ちゃんが唯ちゃんと話している。

澪ちゃんは恥ずかしそうに顔を紅くしながら唯ちゃんをみる。

「ゆっ、唯っ」

「おっおおお…」

何か唯ちゃんがときめいてらっしゃった。

「澪ちゃん！澪ちゃん！俺にもそのときめきのアトラクションやってくれっ！晴樹って！」

俺はチャンスとばかりに身を乗り出す。

「いやいやいや恥ずかしいですっ！」

「澪っやってやれよ」

「りっ、律まで…そんな」

「さあ澪ちゃん言っんだ！」

「ハル君あんまり澪ちゃんをいじめちゃダメよ。」

はっ！美希さんがまた笑ながら怒っている。スゲー怖いっ！

「おっおおお…」

つか、唯ちゃんときめいたまんまだな…

また一人増えた軽音部はこれからだ。

…つつてもまだなんも活動してないがなっ！

### 第三話（後書き）

まず一つ…

一、二話を読んでくださった方々こんなに遅くなってしまって申し訳ありませんでした。

次に…

この『軽音部の日常』はなんと第三話で終わりですっ！

ほんとは、もう二話めでだいぶ心が折れてました。もうキツイと。かなり長編の話を執筆している方達は神なのかと。

ふざけ話はこの辺にして。

二話目でブツッリ終わらせてしまうのは何だか自分で産み出したキヤラ達が可愛そうだなと思ったのでとりあえず三話まではと思い三話で何か終わりっぽい形にして終わりにしました。… 多分

… 何か言い訳っぽいかな。

最後にこの小説を最後まで読んでくれた皆さんありがとうございました。

またいつかさようならっ！

また小説を執筆をしたときにはまた会えるかもしれないですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4284w/>

---

軽音部の日常

2011年12月30日23時45分発行